

私にとってのコスモス

コスモス生活

有川知津子

祖母の傍らにはいつも「コスモス」があった。ある日、その一冊を手にとり、目に入った電話番号にかけてみた。入会の瞬間であった。応接してくださったのは、どなたであったか。

全国に広がる会員の学びの場は、おのずから「コスモス」誌上ということになるだろう。私の場合は特に、選者による〈選〉である。この選により不掲載となった歌は、歌のとき具合を考えるきっかけとなる。その「小言」は一人じっと考えるときの補助線となる。

ただ、この一人稽古ばかりでは続かな

かったのではないだろうか。私には、人うねうねと考えたことを試したり、確かめたりする場が必要だった、と今これを書きながら思われている。そうした場として、身近には支部歌会があった。共通の基盤をもつ友人たちとの小さな歌会は、細かなところまで吟味できる楽しさがあった。これは今も変わらない。

歌の成らない日はあるが、歌を思わない日、人を思わない日はない。〈選〉と歌会との間を行き来する私のコスモス生活は、歌の成らない苦しさで歌を思う楽しさからできている。

繋がりとは短歌

磯川 朋美

絵や音楽の出来ない私には、自分を表現する術が文字しかなく、短歌に行きついた。家族やお金、住まいや友人も離別を繰り返すが、短歌は私から離れない。生活に追われて歌を作らない数日はあり、そのような時に詠草提出の締切りが重なりと辛い。しかし向き合っていなかった自分を見つめるいい機会と思い、長めのランチャや泥酔しない夜を作って作歌にこそしんでいる。

毎月十五日は、給料日より重要な日だ。郵便事情によりこの日に詠草を仕上げなければ、二十二日の締切りに間に合わない。そして投函した直後に今号の「コスモス」が届き、主に反省と喜怒哀楽の数字を過ごす。まずはお世話になっている方々のお歌を拝読し、落ち着いてから順に読む。そのうちに歌の種のようなものが自分に溜まっていて、そこからほつりほつりと短歌になったりする。

結社に入会し、日本全国そして海外にも繋がりのある方々がいるのが嬉しい。老若男女その他一切関係なく、繋がりとは短歌だけ。それがどんなに有難く素晴らしいことか、最近本当にそう感じては短歌の力を今日も信じて楽しんでいる。

玉手箱

梅田 陽介

平家の落ち武者が我が家の祖先だと父に聞かされていたからだろうか、何かと下関とはご縁がある。熊本を出て大学生生活を送ったかの地で、たまたま参加した平家難流し神事。その後には赤間神宮で行われる歌会にて森重香代子先生と出会ったことがコスモス入会に繋がった。

先生の主催する「香臈人」に入らないかとお誘いいただき、会に慣れた段階でコスモスへの入会も勧めて頂いたのだ。月十首のコスモスへの投稿（ノルマ）と月一回の香臈人の皆さんとの楽しい歌会が、短歌習熟への両輪となっていた。

それから今年で二十一年。

三十一文字で自分を表現できる楽しさだけで短歌を始め、当初は「もつと人ととの関係を詠もう」と諭されていた。そんな私が妻と子を持つに至り、否応なく彼女たちの存在が歌に関係してくる。捻り出すのに苦心していた歌は、より良い歌

を選ぶ楽しい悩みが変わった。

振り返れば二十代三十代の未熟な歌は「孤独な私」の玉手箱である。コスモスのバックナンバーに下手に手を出すと、しつかり老化した今の私を突き付けられる恐怖がある、ような気もする。

間違えて正解

大西 淳子

間違えたのである。今から四半世紀程前、「歌壇」という世界を知らず「結社」という組織に接することなく、短歌を作りはじめた私。当時、短歌と言えば「NHK短歌」くらいしか知らなかった私は、とりあえずこの三十一文字の短歌らしきものが、ちゃんと短歌と呼べるものなのか確かめるため、NHK学園の通信講座で添削を受けることにした。

同時に、私はことある毎に「本を出す」と周囲にうそぶいていた。すると友人が「あなたの原稿を本にします」という新聞広告を持ってきてくれ、本当に何を間違えたのか、第一歌集を出版してし

まった。

その歌集を、母が自分の職場に持っていったからだ。私の高校時代の恩師の母が働いていたそこに、コスモス会員の方がおられる「なに、歌集？どこの結社？まだ結社に入っていないなら、ぜひコスモスに」と声をかけてくださり、現在に至る。

この歌集は、実質第零歌集であり、間違えたときか言いようがないが、そのおかげでコスモスに入会できたことは正解であった。

歌のご縁、人のご縁

河合 育子

毎月、コスモスが届くと、全国の友人たちからの手紙を読むように、たくさんの方々の歌を読むのが楽しみである。

憧れの大先輩、知り合いの仲間たち、同じ愛知支部の方々、面識がないが作品に惹かれて毎月お名前を探す方々もたくさんおられる。一首一首を読みながら、本当に歌からお一人お一人の声が聞こえ

てくるような気がするのである。

性別も、年齢も、職業も超えて、歌を詠み、読むことだけで、毎月つながつている方々。そして私が歌を詠むことに巡り合えなかったら、決して出会うことができなかった方々である。不思議な、そして温かい縁に恵まれたことを感謝するばかりである。

私にとってコスモスは、まさに歌の縁、人の縁を結んでくれる場であり、やはりコスモスは広くて深い歌の無限の宇宙なのだと思うのである。

コロナ下で、人と人が交流を持つのが難しい時代である。けれども互いに歌を讀み合う、歌で結ばれた縁は、不思議と何年お会いしなくても、毎月お会いしているかのような心の近さ、親しきがある。歌の縁がすばらしいと思うのはそんなときである。

十五年かもしれない

小島 なお

私にとってのコスモス。あらためて聞

かれるとむずかしい。祖母も母もコスモスだったので、迷うような選択肢が自分のなかにはじめからなく、あたりまえのようにコスモスに入っていた。おかげさでなく、ほんとうに気づいたときにはもう入っていたという状態。

そうやって海に漂う芥のように流れに身をまかせて約十五年。いつのまにか年を取っていた。二十歳で入会したので、いつまでも年少気分が抜けないままのどかに甘えて過していたら、気持ちとずいぶんギャップのある結社歴を重ねてしまっていた。

決して多くはないけれど、自分と同年代、あるいは年下のこないだまで学生だったような子が、熟考を重ねてコスモスに入ってきてくれたりする。ちゃんと自分で働いたお金で会費を払って。彼らの意思と行動力にはとてもかなわないと思う。その決断を尊敬するし、たいせつに守らなければと思う。十五年も漂った芥に守られなくとも、まったく大丈夫なのかだろうけれど……。こういう風な心境になることがつまり十五年の歳月なのかもしれない、かもしれない。

もうひとつの呼吸

斉藤 倫子

入会したのは三十二年前、大学四年生の夏であった。当時、青森支部の歌会は、在籍する大学の豊島秀範先生の研究室で行われていて、私は学習会員として出席させてもらっていた。卒業後も、宮柵二先生の歌と、歌会の楽しさから離れたくないと思ったのが入会の理由である。

入会してから七年後、私は専業主婦になり、母になった。その頃は、知らない土地で育児をするプレッシャーと、母であること以外の自分が消えたように感じる寂しさで、息苦しかった。けれども、コスモス誌を讀んでいる時は、私にはたくさん仲間がいる、私の歌を讀んでくれている人がいる、という思いで視野が明るくなり、呼吸が楽になっていた。真夜中に歌を詠み、コスモス誌を讀むことは、育児と同じように誰も見ていない密かな行いだったが、そこに母であるだけではない自分を見つけていた。

「コスモス」は私の心が生きるための呼吸である。大人になった時からずっと「コスモス」で歌を詠んで生きてきた。欠詠して歩みを止めてしまったら、それからは半分しか呼吸ができないだろう。それほど大切に思っている。

静かにあなたを愛していた

島本ちひろ

コスモスに出詠を始めたばかりの、二十代前半の頃のことだ。私は当時、デパートの菓子売り場でアルバイトをしていた。休憩時間には従業員用の休憩室を使うことが許されていて、そこで昼食を食べたり眠ったりすることができた。

私は大抵、休憩時間にコスモスを読んでいた。長くもないその時間の中で、先輩方の歌をひとつひとつ眼で追い、心に迫った歌に臙脂色のペンでしるしを付けた。そのようにしている間は、同じように休憩する人たちの話し声がとても遠く感じられた。あの時、私はひたすらにコスモスとだけ向き合っていた。

あの時間こそが、私にとつてのコスモスなのだと思う。パイプ椅子に座り、ペンを片手にコスモスを捲っていた、静かで幸福な時間。たくさんの「あなた」から送られた言葉と心を、青白い蛍光灯の下で受け取っていた時間。自己すら薄まっていた、言葉だけがそこに存在していた、そんな得難い感覚。

コスモスが毎月届くたび、私はあの時間を思い出し少しだけ泣きそうになる。つるりと優しい表紙に触れると、心にあたたかさ満ちるのだ。

コスモスとの出会い

内藤 丈子

無性に歌を詠みたいという気持ち湧き、地元の講座で学び始めたのが十年前である。同時に朝日歌壇に投稿を始め、掲載されるのが励みとなっていた。

そのうちに、互いに批評しあって深めたいと思うようになり、様々な結社から見本誌を送ってもらった。

中でも、コスモス誌の内容がとても充

実していることに魅了された。いろいろな学びのコーナーが工夫されている上に読者との交流もできる暖かい雰囲気。そして、先輩の方々の深いお歌に感銘した。素敵やなあ、目標としたいなあ、と、見本誌のページをめくりながら、すぐ、コスモスの入会を決めた。

初めての全国大会（二〇一九年）も、とても楽しかった。終始なごやかな中で高めあえる内容に感動した。新米の私は内心不安だったが、大先輩の方々が気さくに話してくださり、胸がじんと熱くなった。入会して本当によかった。

作歌に四苦八苦して、今もよくため息をついているが、県外から来た私を暖かく迎えて下さった京都支部の皆様とお話したり、途中、JR湖西線から琵琶湖を眺めたりするひとときに癒されている。

われわれ

中村 恵

穂村弘のエッセイを読んで短歌に興味を持った。ようやく右と左がわかるよう

になった鳥取で、インドアな趣味をもつ友人が欲しかった。できれば何か作ってみたかった。見学帰りに渡されたパンフレットに惹かれた。「みづからの生の証明を」。実は高野公彦も宮柁二もよく知らずにコスモス短歌会に入会した。

徐々に仲間ができた。自分にどう写ったかを見せあい、それを認めあう。どう表現したら伝わるか工夫を凝らし、読者に楽しんでもらうことを考える。短歌の話をするのが楽しくなった。

外出自粛の聲が高まり、家にいながら遠くの人と交流することが簡単になったことが私にはプラスだ。田舎にしようと持病があるうと関係なくなる。

歌人はいったん近くなり、そして遠くなる。本棚に歌集が増え、懂れの存在も増える一方。高野公彦は高野さんに、宮柁二は宮先生になった。時には歌を詠むことに苦しむ。楽しくない時もたくさんある。仲間がいることが私を助ける。「みづからの生の証明を」を振り返り、「われわれ」という語に私が含まれていることをたしかめる。

歌の縁

早川 晃央

十五歳で入会し、十七年目。人生の半分以上コスモス会員ということになる。

柁二先生はお見かけできなかったが、英子さんにお会いできたことが貴重な経験だったと思う。大学生の頃の合同出版記念会で、挨拶していただいた。当時は英子さんの顔を知らず、誰だろう?と思っていたところ、「早川君ね。宮です。」と言われ、恥ずかしい思いをした。

奥村晃作さんには、高校生の頃に勉強会に誘っていただき、特に学生の頃、歌のいろははもちろん、本当にたくさんのことを教えていただき、感謝してもしきれない。このタイトルも奥村さんがしばしば言っておられた言葉を頂いた。

コスモス誌をひらけば、ほとんどは顔も知らない人だが、歌を読めば、同じ思いをしている人がいることを知り、歌に励まされることもある。知っている人とは、歌を通して対話をしている気になれ

る。毎月コンスタントに歌を詠み続けることが容易ではないこともある。欠詠0でやってこられたのは歌の縁が大きい。今も締め切りに追われながら、今後も会員の一人として、ゆるく長く続けていければと思っている。

歌で繋がる

前中 映

昨年「宇宙の花」を担当した。編集部から話を頂いたときは「大変なことになった」と思ったが、実際は想像以上に大変だった。気を抜いてはいけないぞと自分に言い聞かせつつ一首ずつ丁寧に読み、少しでも心が動いた歌には印をつけ、読み返しながら数を絞っていく。一行二行のコメントにも頭を使い気を遣う。「宇宙の花」の原稿と自分の詠草だけでひと月が終わっていくようだった。

そんなある日、私が選んだ歌の作者から葉書を頂いた。やる気を失いかけていたが自分の歌を読んでもくれる人がいることを知り、頑張ろうという気持ちがい

てきたという内容だった。一面識もないその人と私が一首の歌によって繋がりがあえるということに私は胸を打たれた。そしてそのとき、自分がコスモスの一員であることを深く実感したのであった。

私の選歌で何かが変わる人もいるのだと知ってますます気が抜けなくなりましたが、一読しただけで胸に深く入り込んでくる歌や、繰り返し読むことでよさがじわじわとわかってくる歌にたくさん出会うことができた。この役目を与えて下さった編集部の方々に深く感謝している。

父と同じ結社を選ぶ

人見 江一

私が短歌を始めたのは三年前の父の死がきっかけである。父、人見忠は「多磨」を経てコスモス創刊以来の会員で、サラリーマン生活のかたわらコスモスの編集に携わり、高齢になっても老人会で短歌を教えるなど歌一筋の人生だった。

歌歴は長いが父にはこれまで歌集が無かった。亡くなる少し前、父に代わり小

冊子の歌集『原風景への旅』を作り、病床の父に手渡すことができた。この歌集作成の過程で父の歌をつぶさに読み、父の短歌とコスモスへの想いを知って、自分も歌を始めようと思った。

私の名付け親は宮先生である。中国の詩人陸凱の「一枝の春」から二字を取り江一と付けていただいた。宮先生が創刊し、父が生涯会員であったコスモスを選ぶのに迷いはなかった

入会後さっそく地元のもえぎ野勉強会に参加し、昨年からは奥村晃作さんの講座に通い、短歌の実作と鑑賞の学びを続けている。

白秋に憧れ宮先生を師と仰いだ父を目標に、コスモスに残る数千の歌の中に生き続けている父と対話しながら、これからも作歌に励みたい。

となりのコスモス

宮 梓一

コスモスは自分にとって、いつまでも到達することのない「となり」だった。

家の扉を開くと必ず事務所が見えた。けれど、そこで数多の人の想いが編まれていることは、ピンと来ていなかった。

扉はきつと、いつも開いていた。その扉をふとノックしたのは、三十路を折り返した春だった。

私は祖父・宮修二を知らないが、祖母・宮英子のことは今でも鮮明に覚えている。その祖母はもういない。両親とも、いつか会えなくなる日が来る。

大切な人たちと会えなくなるとき、自分のそばで祖父母やコスモスを知っている人、覚えている人がどれだけいるだろうと考えたとき、すぐに思い浮かばない自分に愕然とした。

宮修二を、コスモスを知りたかった。宮修二やコスモスを知る人たちと出会いたいと思った。

もっと早く、せめて祖母がいるうちに扉を開いておけばと思うこともあるが、コスモスのおかげで短歌を始め、数々の出会いがあり、世界が広がった。

コスモスはもう、となりではない。扉の中は、どこまでも広がっている。